

書 評

立命館大学法学部叢書 第9号

水口憲人著『都市という主題 再定位に向けて』

加 茂 利 男

### はじめに

書評というのは意外に難しい仕事である。とくに学問的な作法にのっとった書評を行うことはいっそう難しい。現に評者などは、できるだけクールで客観的な書評をしようとするあまり、先学の優れた業績に対する敬意を忘れて必要以上に辛辣な評を書いてしまい、「非礼」のそしりを受けたことが何度かある。「8割は褒め2割ほど問題点を指摘するのが無難」だというので、そういう書評を書いたことも多いが、それでは所詮儀礼的になってしまい、後味の悪さが残った。

このように書評の難しさを自覚するにつれて、いつしか書評をすること自体に引込み思案になった評者であったが、はからずも今回水口憲人氏の『都市という主題 再定位に向けて』を書評する羽目になった。本の中身に食指が動いたこともあるが、この書物の「あとがき」で著者が、本書を書くよう動機づける圧力をかけた「長年の友人」として評者のことに言及し、エールを送ってくれたことで多少気持ちを動かされた面もある。

このようにいうことは、書評の作法についての上述の反省といささか矛盾するかもしれないので、予め言い訳をしておく。著者とのパーソナルな親しさがこの書評を書く気にさせた一因であることは事実だが、半面「親しき仲にも礼儀」で、緊張感のない批評をすることが著者への学問的な敬意を欠くことになることは意識しているつもりである。「長年の友人」として、共通の学問的関心をもって交流してきた同僚に対して、どんな「書評の作法」を示せるか。これは評者にとっても一つの実験である。

## 知的傾向

著者との親しい間柄に免じて、いきなり人物評から入ることを許してもらおう。水口氏の書物を読むときには、いくらか知識社会学的なアプローチをまじえたほうがわかりやすいように思うので、あえて本の中身に入る前提として彼の知的な傾向や流儀について述べておこうというのである。

「知る人ぞ知る」ことだが、著者は相当な皮肉屋であり、天邪鬼である。どんな本を読み、話を聞いても、それをストレートには受容せず、まずは「斜め」や「裏」から懐疑の目で見て、水をかける傾向がある。これは哲学的な懐疑主義や批判主義といった体系的なものではなく、著者の知的な「癖」ともいうべきものである。とにかく他人の発言や著作にたいしてまず皮肉をこめた懐疑や批判で反応することが多く、少なからぬ人々がまずこの皮肉・批判の毒気に当てられる。

ただし評者の見るところ、著者の皮肉や批判は見境なく発せられるのではない。いったんは疑っても、最終的に彼が敬意を払うに値すると評価した人や作品には、惜しみない賛辞が送られる。これは思想や方法において彼と一致しない相手にも採られる態度である。また彼には一般的な傾向として、地位や虚名におごって廉直さを欠いたり、学問的怠慢や知的な無神経さのために拙劣な著述や発言をおこなったりする学者や評論家に対しては呵責のない嫌味や苛立ちを投げつけるが、学生や若手の未熟な研究、洗練されていないが努力のあとをにじませた地味な研究には、ときに大甘ではないかと思うほど好意的な態度をみせる癖もある。「弱きを助け、強きをくじく皮肉屋」なのである。

水口氏のこうした傾向がどこから来ているかを説明すれば本格的な知識社会学的書評になるが、それは不可能に近いので、ここでは文字通り若いときから身についた「知的性癖」ということにおきたい。ただこの「癖」は齢を重ねるにしたがって磨きがかかり、知的な態度として練れてきたように思われる。とくに近年、読書範囲がひろがるにつれて、彼のシニシズムのこもった批評はすぐれた学問とそうでないものを識別するセンサーカリトマス試験紙のような性質を帯びようになり、評者などはまず彼の批評を聞いてから、彼がよしとするものを読むほうが効率的で「当たり外れがない」と思うようになってきたほどである。

本書はある意味で、「何にでもいったん水をかける」著者の「シニカル・マインド」が、学問の方法にまで結晶して生まれた書物といってよい。

## 「都市」との対峙

本書は、著者の都市研究の理論的な整理のような作品であるが、また上記のような著者の知的な癖を、学問の方法として意識しようとした点に本書の特徴がある。

著者が「都市」を論じるようになったのは『現代都市の行政と政治』(1985年)以来のことだが、それは宮本憲一教授の影響や評者をふくむ宮本教授周辺の研究者との交流の産物だったといつてよかろう。いつとき「もう都市はやめた。行政学をやる」といって、「国家」とくに「福祉国家」の研究にシフトし、『「大きな政府」の時代と行政』(1995年)などを書いた著者が、60歳前後になってまた「都市」に回帰してきたのは興味深い現象である。評者などは、「国家に飽きて、都市が懐かしくなったのか」と揶揄したのだが、本書を読むと必ずしもそういうことではなかったことがわかる。

旧著は「都市政治」の理論化を図った欧米・日本ででの主要な業績を集めて紹介するという、多くの研究者が比較的若いときに行う学説整理の作業を、都市政治について試みた仕事であったが、本書は「都市」についての古今の研究を、主題的方法的、認識論的な扱い方という角度から批判的に再解釈した本である。いいかえれば旧著は半ば記述的な学説整理だったが、本書は著者自身の方法意識をベースにして、さまざまな都市論を腑分けし批評した書物である。先に述べた著者のシニカルな批判精神のリトマス試験紙にかけ、センサーでチェックして、歴史上の「大家」たちの都市論を読み解こうとしているといつてもよい。この意味で旧著は著者の「若手」時代の研究成果だったが、本書は成熟した学者としての業績である。

では、なぜ著者は再び「都市」というテーマと改めて対峙したのか。それは一つには現代社会の中で「都市」が膨張・肥大してしまい、「都市」を解かないと現代と未来が見えないことを著者が意識し始めたからであろう。もうひとつには、「都市」をこんなに膨張・肥大させた一因が都市論のバイアスであり、都市を「主題」として再定位させないと都市の実像や意味が見失われるという一種の危機感が著者のなかに生じたからであろう。

したがって「都市論の整理」といつても、本書はさまざまな都市論をならべて紹介した書物ではなく、著者が到達した認識論・方法意識にもとづいて諸々の都市論を貫通的に批判したインテグリティの高い本になっている。用いられている概念も、哲学や認識論、記号論、ポスト・モダニズムなどのものが多くなり、著者の学問的レパートリーが20年前と比べて一新されている。「長年の友人」である評者が

らみても、本書で「ニュー水口憲人」に出会った心地がする。

## 「主題」の意味

本書のキーワードは「主題」である。著者はなぜ「都市という主題」をテーマに掲げたのか。

ある概念や事象を「主題」として論じるには、分析者がそれを他から区別し切り取って定義することが必要だと著者は考える。だが、「都市」は「国家」や「人間」と同じように、複合的で多面的な概念・事象であるために、一義的で明快な定義は困難である。そのことは認めてかからないわけにはいかないが、だからこそ「都市」について無限定な論じ方はできない。「主題」を無限定にしたまま論じるとその意味が曖昧に全体化してしまい、対象が却って見えなくなり、書く者にも読む者にも壮大な「知の無駄遣い」になってしまうからである。著者の「主題」意識は、都市がときに社会科学的にときに文学的に、またときに技術的ないし文明論的に議論されることで、わかったようでわからなくされてしまいやすい対象だからこそ、出来る限り明晰に「主題」として定義して議論しないと、都市論は学問にならないとするのである。こういう認識論的境地は、著者が持ち前の「皮肉屋」精神に学問的な磨きをかけることで拓けてきたものではないかと推測する。

本書の冒頭で、都市（都会）と農村（田舎）の二分法で社会現象や政治事象をなんでも説明してしまう評論家の例が出されているが、これなどはわかりやすい実例である。

農村の素朴さ・健全さと、都市の反道徳性や物質主義を対比して、都市主義の広がりやを憂う農村主義や自然主義は、アメリカでは19世紀以来連綿とつながる思想潮流（ジェファソンやソロー、ヘンリー・ジェームズからネオコン原理主義まで）であり、ロシア（ナロードニキ）や日本（農本主義）の思想史にも痕跡を残している。この立場から見れば都市は、人間性が汚染される世界である。

これに対して、農村は非合理的な伝統世界であり、進歩や自由や批判精神は、すぐれて都市に生まれ成育するという考え方も広くみられる。本書で取り上げられている人々でいえば、ウェーバーやマンフォード、ルフェーブルや関一などに垣間みられる傾向であるが、これが都市と農村を丸ごと対立させ、都市を進歩や解放の拠点だと考えるようになると「都市主義」ということになる。都市主義も多くの国に見られる傾向（フレデリック・ハウ、シンクレア・ルイスから羽仁五郎まで）である。都市は都市だけでは成り立ちえず、農村も都市を包み込むほどの包容力をも

でないのに、とかく都市や農村を全体化して世界を説明するのがこうした思想傾向であり、こうした都市主義や反都市主義による「都市」の膨張や氾濫がかえって都市の意味を消失させているのではないか、というのが水口氏の「都市概念の再定位」を促すモチーフなのである。

都市を「主題」として再定位するには、都市を良きものや悪しきものとして曖昧に全体化するのではなく、それを主体の関心によって切り取り定義する作業が必要となる。分析者にとっての都市は、さまざまな主題の「布置」的関連（対象自体の「体系」的関連ではなく、分析者の関心に基づく認識論的関連）の中に置かれてはじめて独自の「主題」になるのだが、このようにして主題化されない「都市」概念は、神秘的に全体化されているために、却って「都市」を見えなくすることになりやすい。このように都市を見えなくする都市論を脱構築してもろもろの主題との「布置」的関連の中で再定義し、明晰化された都市論をつくる 評者の理解に間違いがなければ、「主題としての都市」というのはこういう思考操作の産物であるらしい。

## ルソー、ウェーバー、マンフォード、ジェイコブズ

こうした方法的な視点から、本書ではルソーやジンメル、ウェーバーやジェイコブズ、関一や宮本憲一などの都市論が再解釈され、また都市と自然、都市とコミュニティー、都市空間と都市計画といった主題にそくした都市の考察が展開される。それらをすべて追うことは評者の守備範囲をも紙幅をも超えるので、ここではルソー、ウェーバー、マンフォード、ジェイコブズらの都市論の再解釈や批判について瞥見しておくにとどめたい。

これらの思想家たちの都市論に共通しているのは、都市を単純・一次的にはではなく、複合的な対象・主題として捉えていることであろう。

ルソーについては評者自身も論じたことがあり（『都市の政治学』1988年）、水口氏の見方と重なるところが多い。すなわちルソーは、都市をシテ（自由な市民の政治的共同体）とヴィレ（人や家屋の大集積としての都会）という二重性においてとらえている。彼はパリのような大都会を、文字どおり人間性を汚染する文明の世界だとする都市批判の思考を持ちながら（『人間不平等起源論』、『エミール』や『新エロイズ』など）、他方で農村というより市民の共同体としてのジュネーブのような都市国家に思想的にコミットする（『社会契約』）。ウェーバーは、都市を「商工業で生計を立てる人々の定住地・大集落」として、また「市場地」として一般

的・社会的に定義した上で、「市民の自立的・自主的政治団体」という政治的・行政的な定義を付け加え、後者の意味での都市は西洋にだけ成り立ったとして、その「歴史的個性」をクローズアップし「理念型としての都市」に昇華させている。

これに対してジェイコブズは、都市の起源は交換・取引関係の結節点であったとしたうえで、多様性と差異を含んだ共同体として都市を主題化しているという。

彼らの都市論を追跡しながら著者が提示している問題の一つは、都市論の代表的な大家であるマンフォードがじつは都市を「主題」として定義せず、あらゆる角度から都市を論じ、あらゆる性質を都市に付与することで都市を曖昧化してしまった論者ではないかということである。ルソーにしてもウェーバーやジェイコブズにしても、都市の複合的な性質に目を向けつつその複合体を腑分けし分析しているが、マンフォードは、建築・空間様式・経済・文化・計画・社会教育などあらゆる側面から都市を論じ、都市は「すべて」でもあるかのように扱っているというのである。いってみれば著者は膨大にして「なんでもあり」の都市論としてマンフォード都市論を批判することで、都市学史を書き換えようとしているのである。

評者は、こういう著者のマンフォード論に対してはいささか違和感を持っている。第一に、マンフォードは確かに都市についてやたらに多くのことを論じており、その結果都市の定義、都市論の本筋を拡散させているようにみえるが、ではそういう都市論に意味はないのだろうか。マンフォードの『都市の文化』は、どの部分からでも読め、どの部分もメッセージ性を持っている。社会科学的方法で書かれてはいないが、都市に関する文明論的な知見の無数の引き出しが組み込まれていて読者を魅了するのである。都市学はもともと法則論的な科学ではなかったので、マンフォードのような都市論もなおあってよいのではないか。それを学問ではないとして退けることも出来るが、肯定的に受け入れて社会科学的な都市論に生かすことも出来るのではないか。認識論的な「主題」化という著者の方法は、都市論を明晰化するが、同時に窮屈にもしてはいないか。

第二に、マンフォードの都市論に都市を主題化する思考がまったくないかという点、そうでもないように思われる。水口氏は、ジェイコブズが都市の起源を交換・取引関係に求め、都市の「主題」性を多様性や差異に求めていることを肯定的に紹介しているが、マンフォードも都市の起源は「市場」だといっており、都市の本質は異質なものの出会いや集積だといっている。前者のほうは都市の歴史に関する記述（『都市の文化』第1章）の片隅で触れているので、マンフォードの膨大な記述をかき分けるようにして探さなければ見つからないが、後者についてはゴットマンの『メガロポリス』に対する批判の中で明快に論じられていることである。

ゴットマンが将来の都市の姿をアメリカ北東部の巨大なメガロポリスのような星雲状態の広域拡散型都市圏に求めているのに対して、マンフォードは都市とは人がひしめき歩く「雑踏」に象徴されるような異質なものの出会いであり集積であるといっている。拡散化によって都市からこの性質を奪うと、それは都市ではなくなると彼はいうのである。メガロポリスは人々を自動車という密室に閉じ込めて出会いや集積の実を奪い、都市の本性を壊してしまうというのがマンフォードのゴットマン批判である(マンフォード『現代都市の展望』、『都市の文化』の膨大なメッセージのなかではみえない都市に対する「主題」意識が論争的な場面では割合はつきりとあらわれているのではないだろうか。

「主題」という言葉を認識論的に用いることで、都市概念を明晰化しようとした著者の作業には意味がある。しかし、主題化という要件を強く求めることによって都市論をあまり窮屈にするのはいかなものだろうか。

## おわりに

著者と評者の都市論に関する概念と方法のレポーターには、依然として重なりがあるが、この20年の間に評者はますます経験的研究への傾斜(実証主義)を強めたのに対して、著者はその認識論を磨くことで、評者のもっている概念的装備を大きく超え出ってしまったように思う。そういえばだいぶ前から著者の読書範囲は、ニーチェやフーコー、デカルトやヴィトゲンシュタインなどに傾き、実証的な都市や行政の研究から哲学的な思索に転じていった。評者にはそれがいつかは知的な「隠遁」にみえたが、そうではなかったことが本書によってわかった。著者は抽象的な概念の世界に引きこもっていたように見えて実は学問的レポーターを再構築し、都市論の方法を研ぎ澄ましていたのである。本書をのもとなった論稿を読んだときからそのことにほんやりとは気づいていたが、この書評を書く作業を通じてそのことを再確認できた気がする。